

飛鳥井雅有の奈良・伊勢逍遙

——『仏道の記』の作品化について——

佐藤 智広

はじめに

天理大学附属天理図書館所蔵『飛鳥井雅有卿記事』（孤本）は、二条（飛鳥井）雅有の四編の記事を収めたものである。その子孫である飛鳥井雅威が寛政十二年（一八〇〇）に書き入れを施した際には、最初の部分が既に欠落していたため、冒頭の欠落した作品を雅威は『仏道の記』と名付けた。後続の三編は元々書名が付され、それぞれ「さがかよひ『嵯峨の通ひ』」「もがみの河ぢ『最上の河路』」「みやぢのわかれ『都の別れ』」となっている。

飛鳥井雅有は、『吾妻鏡』の、宗尊親王将軍時代の記事にその名が散見され、鎌倉を生活の拠点としていたように見えるが、文永三年（一二六六）父教定の死去、宗尊親王の将軍職停止による帰京といった公私にわたる節目の時期に都及びその周辺を旅している。雅有家集『隣女和歌集』巻二は文永二・六年の詠作を収め、そこに京鎌倉往還や都近辺での旅中詠が見られる。『仏道の記』に記される歌には、『隣女集』巻二と合致するものがあり、この時期の雅有の体験が、日記として記されたことは疑いない。

この『仏道の記』は、前述のように冒頭部分が欠落していて、内容は判らない。しかし、上洛途中の東海道の旅から始まり、須磨・明石での観月と続くことから、おそらく鎌倉出発を起筆としているのだろう。現在見られる状態での『仏道の記』は、全体を三部または四部の構成と捉えられる

が、私は三部の構成とみて

上洛から須磨・明石での観月（明石観月）

芦屋での仏道修行生活（芦屋隠棲）

奈良・伊勢への旅（奈良・伊勢逍遙）

と区分している。

こうした旅を中心とする雅有の体験が作品化されることに対し、既に虚構の認められることが指摘されている<sup>1)</sup>。私も実体験を記録としての日記ではなく、作品として著している点について考察を試みている。本稿では、『仏道の記』末部にあたる（奈良・伊勢逍遙）の場面を取り上げたい。『仏道の記』所載歌と『隣女集』巻二所載歌との関わりについては、既に渡辺静子氏が比較考察しておられるが、特にこの（奈良・伊勢逍遙）については

この辺の記述はまことに簡略、曖昧で明瞭さを欠く。この段もこれと独立しているようで、前の続きとは思われ難く、何か別な時期の記述があったものを付けたものか、または簡単なメモのような歌と記述があつて、それを整理して、日記ふうに綴り合わせたものか、テーマらしいものはない。が、ただ、かなり強い悲嘆の情にくれながら、春日社、伊勢神宮に詣でていることは確かで、これらにより、これも一つの重要な契機をもっている記述であるとれる。

と述べておられる。渡辺氏は、前述（明石観月）（芦屋隠棲）とこの場面がまとまっているという立場をとり、何らかの事情で現在の形になったと考えておられるようである。しかし、現状の形態での検討が不十分である以上、まずは今の形での読みを試みることに先決であろう。よって、本稿では作品化の一端を明らかにし、まとまった一つの日記作品としての可能性を考察したい。

## 第一節

まずは〈奈良・伊勢道逢〉場面を掲げる。

正月十日あまり、都へ上らんとて、植ゑ置きたる八重桜を見て

① 植ゑ置きし若木の桜咲き初めば告げよわが背子見に帰り来ん  
(15)

水無瀬殿の懸りを見て

② 朽ち残る桜を見ても忍ぶかな荒れにし宮のいにしへの春(16)  
四月晦日ごろに、奈良へまかるとて、木幡山にて

③ 木幡山峰立ち越えて見渡せば伏見の小田に早苗採るなり(17)  
宇治にて

④ 数ならぬ身を宇治橋の長き世に朽ちぬ名ばかりいかで流さん  
(18)

春日の社にて

⑤ 捨てはつる心も知らず白木綿に恨をかけて歎きつるかな(19)  
奈良にて、時鳥をきよて

⑥ いにしへの声かあらぬか時鳥古りにし里の人に問はゞや(20)  
伊勢に領る所あれば下る。道、深山続きなり。

⑦ 涙だに干しあへぬ袖をみ山路の木の下露に濡れぬ日ぞなき(21)  
伊勢にて、越えし山を見やりて

⑧ 我が越えし山路を見れば白雲のはるゝ時なき高嶺なりけり(22)  
五月雨繁きころ、大夫が詠めりし

⑨ かりそめと思ひしものを五月雨の日数ふりぬる草枕かな(23)

一見して判るように、歌に先立つ記述は極めて短い。⑦の前が終止形で完結する以外は、接続助詞「て」や格助詞「にて」、「あるいは助動詞「き」の連体形と、直接詠歌へと繋がる句でしかない。地の文はそれに続く歌を簡略に説明するに過ぎず、歌集における詞書の役割に類似する。しかし、歌集とは異なり、歌は地の文よりも二字ほど下げて書写されている。少なくとも、現存伝本においては、歌集の断片という意識は認められない。その一方、『仏道の記』現存部分の歌が全体で二十三首であるのに対し、〈奈良・伊勢道逢〉場面が九首を占め、『仏道の記』末部に至って歌集の断片が紛れ込んだように見えることも、あながち否定はできない。

飛鳥井雅有の日記には、こうした形を持つものが他にもある。建治元年(一二七五)秋から冬にかけての日々を記した『都の別れ』は、都から鎌倉へと下る紀行(旅日記)と鎌倉到着八月十五・十六兩日の記事がその大部を占める。この末部は「折々詠み侍りし歌」と記され、おそらくその年の冬に詠んだと思われる和歌十一首が、ごく簡単な地の文と共に配されている。

また、文永六年(一二六九)の秋から冬にかけての日々を記した『嵯峨の通ひ』は純然たる日次記で、末部に歌が並ぶことはない。しかし、最終十一月二十八日の記事の直後に、行を空けずに『最上の河路』と題された別作品が続いている。『最上の河路』は冬に都から鎌倉へ下る旅をごく短い地の文と十七首の歌で綴った、雅有の日記作品の中でも特に短いものである。佐藤恒雄氏が「家集の断片か旅中のメモそのものと誤られそうな片々たる作品であるが、雅有の方法をかえって荒削りのままに露呈させていて甚だ興味深い。」と述べておられるような体裁となっている。『最上の河路』は作品中の和歌が、雅有の家集『隣女和歌集』中の文永七・八年の作品を収めた巻三の歌と共通し、この時の旅が文永七年か八年の冬であることは

疑いない。『嵯峨の通ひ』とは少なくとも一年の隔たりがあるのであるが、そうした隔たりは『隣女集』との比較において判明するのであり、作品そのものとしては『嵯峨の通ひ』と『最上の河路』は一連のものと読めるようになっている。

このように雅有の日記作品は、まとまった日記に続いて和歌を配することの特異なことではなく、むしろ、それまでのまとまった日記部分との関わりにおいて、和歌を記しているとみてよいのである。

## 第二節

こうした日次部分と〈奈良・伊勢逍遙〉との関わりを探る上で、まず考えておきたいのは、簡略な地の文における虚構である。本稿該当部九首のうち、『隣女集』巻二との重出状況を見たい。

『隣女集』巻二所載歌で、この場面の歌と重出するのは①③⑦⑧の四首で、このうちほぼ同じ形で採られているのは③⑦⑧である。それぞれ

\*ものへまかるとて、木幡山にて

こはた山みねたちこえてみわたせばふしみのをだにさなへ取るなり

(七九五)

\*山をこゆとて

涙だにほしあへぬ袖をみ山ちのこのした露にぬれぬ日はなし(七九九)

\*伊勢に侍りてよみ侍りし

我がこえし山ちをみればしら雲の晴るる時なきたかねなりけり(七九八)

と確認できる。⑦⑧と歌順が前後し、七九九歌第五句が「ぬれぬ日はなし」となっているものの、状況的な問題はない。

これに対して、先行諸注釈で指摘されていないが、状況の変わるものが

一つある。それは①で、『隣女集』によれば、

桜をうゑおきて、ものへまかり侍るとて

うゑおきしわかぎのさくらさきそめばつげよわがせこみにかへりこん(三〇五)

となっている。『仏道の記』において、芦屋を離れて上洛する時に詠んだと記されるものが、「ものへまかり侍る」時のものと記される。「まかる」は退出や下向といった精神的な上から下への移動が本義であり、後には移動そのものを表すようになっていく。『隣女集』の用例では

鎌倉へまかりて侍りしが、やがてかへりのぼるべきよしおもひて侍りしに、心ならずひさしう侍りて(六四八詞書)

などがある。一方、

摂津国よりまかりのぼりて(二三〇詞書)

のように、「まかる」を使用するとしても、都へは「のぼる」ものなのである。つまり、当該三〇五番歌は『隣女集』においては、都からどこかへ出発する際に詠んだものと考えられる。都からの下向ならば、桜が咲いたことを伝え聞いて早く帰りたいのも都であるが、『仏道の記』の形では、今去ろうとしている芦屋に再び戻ってきたい、とまったく反対の意味になってしまう。

①の歌は「わが背子」への呼びかけの歌となっている。「背子」は男性の友人であるが、『仏道の記』の構成をふまえてこれを考えると、芦屋での三日間の修行生活の契機となった人物が想起される。

十月ばかり、昔朝夕馴れたりし人、藤衣にやつれて、上なき道にのみ心を深くかけて、国々を歩きしに、唐土へ渡らむの心ざしにて、道なればこの所に廻りきぬ。やうくくにしらへいひて、この外山のおく、み山の麓に、里より五十丁ばかり登りて、昔寺房などありけるが、今

はあとと見ゆる礎だになし。

かつて慣れ親しんでいた人物と芦屋で行き逢い、山奥に草庵を結んだ。雅有もその庵で修行の体験をするのが「芦屋隠棲」なのである。とすれば、「わが背子」はこの友人以外に考えがたい。出家を果たした友人、そしてそれに関与しながらも結局は山を下りた雅有、そうした関係においてまた戻ってくるという意味のものととして、芦屋を離れるに際して詠んだ形にしたのであろう。歌の本意としては都に再び戻りたいという気持ちを表現する『隣女集』の詞書の方がふさわしいといえようが、それをあえて芦屋での詠としたのは、『仏道の記』という作品としての文脈に他ならない。

そしてそれは、⑤の歌にも言える。

春日社に詣でた雅有は、世を捨て去った心も理解できずに、藤原氏の氏神である春日社に世俗でのままならない境遇を訴えてしまう。かつての友人が世を捨て、それに憧れを抱きながらも、自らの社会的な地位を顧わずにいられない、そうした心を詠んだものと理解できるのである。この⑤の歌は『隣女集』には採られていないが、同じく巻二には

春日社の御前の藤をみ侍りて

かすが山ふぢのかたえのはなさかでとしふるとだに神はしらずや (三

七三)

がある。三七三歌も花が咲かないまま、つまり家名が上がることなく、徒に時が経っているということ詠んだもので、世俗への執着心が共通する。おそらく同じ時の詠歌と思われるが、「芦屋隠棲」場面での友人との対比という点で、三七三歌ではなく、⑤を採ったのだと考えられるのである。

### 第三節

このように見ていくと、「奈良・伊勢逍遙」の歌々が置かれた意味も明ら

かになってくるだろう。

まず④は、宇治橋のようにいつまでも名(家名)が残ることを希求する点で、⑤と共通する。明石での月に対する風雅な心、芦屋での仏道へ傾く心とは対照的に、現実社会での自らの位置を顧みずにはいられない心理が、「いかで流さん」という反語で表現されている。

②については「水無瀬殿の懸り」とある。『隣女集』には、桜の歌ではないが柳を詠んだ

水無瀬殿の柳を見侍りて

みなせがはあれにしみやをきてみればくちきのやなぎはるめきにけり

(二七一)

もある。この「懸り」の木は、先学諸氏のご指摘のごとく、蹴鞠場の四隅に植える(立てる)木である。雅有の蹴鞠書『内外三時抄』には家の流儀として柳・桜・楓(蛙手)・松の四本を示しているように、後鳥羽院離宮であった水無瀬殿にも鞠場の木が植えられ、それが残っていたのである。雅有自身が後鳥羽院とつながりがあったわけではないが、祖父雅経は後鳥羽院時代に歌鞠二道で活躍した人物である。そうした家としての血脈をふまえて、懐旧の心情を詠んだものと考えられる。同様に、⑥も古き都であった奈良で、ホトトギスの声を契機として、昔を偲ぶ感情を歌にしたのであろう。

さらに注目されるのは、末尾の伊勢における三首である。涙に濡れる袖を更に濡らす木の下露という⑦、晴れることのない空という⑧、徒に日を過ごしているという大夫の歌⑨。明石での観月、芦屋での仏道帰依といった体験をして、一旦はそれに没入しながら、現実社会に身を置く家督者としての自分がそれを阻み、翻弄されていく。そして、そうした境遇を沈潜した感情で表現して作品を閉じているのである。

〔明石観月〕〔芦屋隠棲〕については、月に見入る主人公雅有が、月と向かい合う場面を歌で表現しない、という共通姿勢を見いだした。そうした場面と対極的に、〔奈良・伊勢逍遙〕では、理想と現実の狭間で嘆く主人公雅有が歌を通して造形されているといえるだろう。

文永三年（一二六六）、父教定が鎌倉で死去し、幼少より仕えていた宗尊親王も都に戻された。鎌倉における喪失を体験した雅有は、都での公家社会の一員として、また二条飛鳥井の家督者として新たな生き方が要求されたはずである。『隣女集』には

一両年在京ながら、或所勞或服にて出仕におよはず侍りて  
いひしらぬ身のつらさかなよそにだに雲のさくら見てややみなん  
(三四六)

亡父が日記を見侍るついでに、本望の不達侍りし事を思ひいだし花さかでかれにし藤のすゑなればなにを待つとかたのみかくべき

(八九〇)  
のような、家督者としての苦悩を見せる歌がある。

そうした時期にあつて、雅有は都での生活を記さない。〔明石観月〕では上洛の途から嵯峨に寄るもの一日で芦屋へと下つてしまふし、〔奈良・伊勢逍遙〕においても、一月の芦屋からの上洛を記して、すぐに奈良への出発を配している。逆に言えば、都での日常を避けた形で、この日記を構成したと言えるのである。都にはやってきたが、都での公家社会の構成員としての位置は確定せず、そうした実情の中において、風狂とも思える非日常の体験〔明石観月〕〔芦屋隠棲〕を記し、それでも日常の自己として願わずにはおれない家の繁栄との狭間で揺れ動く主人公雅有を描いたのが本作品だと考えられるのである。

もちろん、『隣女集』との比較において判るのは、文永二年から六年の体

験ということであつて、作中時間が文永三年の父の死・親王帰京の後であると即断はできない。しかし、日記執筆の時点ではこうしたことを意識して、構成したことは十分にあり得るだろう。

おわりに

飛鳥井雅有の『仏道の記』は意図的に構成された作品と考えられる。断片的な記事が偶さかまとまったものではない。

すなわち、須磨を経由して明石で観月を果たすような風雅で非日常的な体験〔明石観月〕、芦屋での寺の造営から修行といった信仰への志向を見せる非日常的な体験〔芦屋隠棲〕がある。この二つは俗世との関わりを絶とうとしながらも、結局はそれを果たせない雅有として描かれる。そしてそれを引きずるかのように、非日常としての旅〔奈良・伊勢逍遙〕を続け、そこで日常の中のあるべき自分を模索するかのように、過去を偲び、家運を願う雅有という形で集結させたのである。

こう考えると、作中時間では後続する『嵯峨の通ひ』の執筆意図も関わってくるであろう。『嵯峨の通ひ』は雅有が都にありながら、嵯峨に籠もっていた日々を中心とする日記であるが、そこで体験したことは「自身の存在証明を果たした」ものであった。それとは逆に自分の位置を見出せずに苦悩する主人公雅有を描くのが『仏道の記』といえるのである。

こうした志向性は、雅有の日記文芸の特質に他ならない。そして、社会的な位置づけに揺れるという男性社会ならではの日記文芸として改めて評価できるのではないだろうか。

## 〔注〕

- 1 佐藤恒雄氏「飛鳥井雅有『無名の記』私注―作爲または虚構について―」(『中世文学研究』7号、昭和56年8月、中四国中世文学研究会) など
- 2 拙稿「飛鳥井雅有の明石観月―『仏道の記』の作品化について―」(『緑岡詞林』19号、平成7年3月、青山学院大学日文院生の会)
- 3 拙稿「飛鳥井雅有の芦屋隠棲―『仏道の記』の作品化について―」(桑原博史編『日本古典文学の諸相』平成9年1月、勉誠社)
- 4 渡辺静子氏「飛鳥井雅有卿記事と『隣女集』―『無名の記』と『隣女集』の関連―」(『日記文学研究』第一集、平成5年5月、新典社)
- 5 『仏道の記』本文は、濱口博章氏「飛鳥井雅有日記注釈」(平成2年、桜楓社)による。ただし、その底本である天理大学附属天理図書館所蔵の本文を確認した上で、読点の位置や漢字表記を私に改めている。歌末尾の算用数字は、『仏道の記』における通し番号である。
- 6 佐藤恒雄氏「中世紀行文学の再評価―飛鳥井雅有の作品から―」(『国文学解釈と鑑賞』54巻12号、平成元年12月、至文堂)
- 7 拙稿「日記文芸としての『最上の河路』―『嵯峨の通ひ』との関わりを中心として―」(『日本伝統文化研究報告』平成5年1月、筑波大学文芸言語学系)
- 8 『隣女集』歌番号並びに本文は『新編国歌大観』による。  
前掲注1・4の他、以下の注釈書。  
水川喜夫氏『飛鳥井雅有日記全釈』(昭和60年、風間書房)  
渡辺静子氏『無名の記』の研究』(『大東文化大学紀要』30号、平成4年3月、大東文化大学)
- 9 渡辺静子氏・芝波田好弘氏『無名の記』(中世日記行文学全評釈集成第3巻所収、平成16年、勉誠出版)
- 10 前掲注2。  
拙稿「二条中将入道について―飛鳥井雅有『嵯峨の通ひ』注釈小考―」(『解釈』44巻8号、平成10年8月、解釈学会)

(さとう) ともひろ 昭和学院短期大学人間生活学科 助教授